

# 經濟論叢

第157卷 第2号

---

## 哀 辞

故 飯野春樹元教授遺影および略歴

- |                          |         |    |
|--------------------------|---------|----|
| 固有価値と人間ネットワークの形成……………    | 池 上 惇   | 1  |
| 組織環境の特性とその意味付けの連鎖……………   | 崔 俊     | 24 |
| アダム・スミス芸術論と18世紀民衆娯楽…………… | 後 藤 和 子 | 48 |
| 費用効果分析による医療資源配分について…………… | 土 屋 有 紀 | 64 |
| 追 憶 文                    |         |    |
| 飯野春樹先生が残されたもの……………       | 庭 本 佳 和 | 80 |
| 飯野春樹先生を悼む……………           | 田 尾 雅 夫 | 85 |
- 

平成8年2月

京 都 大 学 經 濟 學 會

## 飯野春樹先生を悼む

田 尾 雅 夫

飯野先生は、周知のように、わが国において、チェスター・バーナードの経営学を普及させ、それを組織を理解するために欠かせない理論体系として定着させた人である。先生の薫陶を受けて、多くの学者が育っていったのは周知のことである。さらにいえば、著書などを通じて、先生の影響を受け、バーナードの経営学の世界を知った人は無数といってもよいほどである。組織論や経営学の世界で、飯野バーナード学を知らない人がいたとすれば、よほどの駆け出しか、学者を名乗りながら、その学問を真剣に学ぶことのなかった学者もどきの人といっても差し障りはないであろう。

しかし、私が、飯野先生の追悼文を書くことになったというのは、よほどのことではないかと、その因縁に内心、大いに戸惑っている。私は、そのバーナード学からはるかに外れ、しかも、経営学という学問からさえも、若い頃から距離をおいてきたはずである。門外漢といわれても構わない。それだけに、身のほどを知るからこそ、先生に追悼文を捧げようなどとは、それ自体が、私を困惑させることになる。

その証左に、私は、飯野先生と、二人だけで話し込んだといえ、学会懇親会での数秒の立ち話以後、足し合わせても、5時間を超えることはない。誰かがいて一緒になって話し込んだといっても、20時間を超えるかどうか疑わしい。少し親しい友人や知人であれば、相応に、二人だけで顔を合わせ、それなりの親密な会話があったはずである。飯野先生とはそれがなかった。そのことは大いに私を悔やませる。先生との会話がわずか20時間というのではあまりに短い、短すぎるといってよい。

それに、これほど早くいかれるとは、思ってもみなかったことであるし、それならば、病院にでもご自宅にでも押しかけて先生との距離を縮めたかったと後悔の念は深まるばかりである。後から思っても仕方のないことは思いながら、先生の健康回復を信じて疑わず、何もできなかったこと、何もしなかったことは、残念という言葉さえも虚しくしてしまう。それにしても、先生とは、同僚としておつきあいさせていただくのは一年間という限られた時間の枠のなかだったというのは、分かっていたことである。何もし

なかったというのは、私の怠慢以外の何ものでもない。

加えて、先生は、語りの少ない人であったし、得意な人でもなかったようである。私も、どちらかといえば語りを得意としない人間である。だから、聞き下手でもある。それだけに、先生との距離を少しでも縮めたいとの気持ちは、出会いのときからあり、赴任の後も、先生が何を考えているのか、思っているのかを知るためには、二つの耳だけでは足りないと考えていた。だからこそ、全身を耳のようにして、先生の語りの奥にあるものを聞こうとした、また、聞いたつもりでもある。

それに、人には、ときとして、短いけれども、その人生のすべてを決めるような出会いさえなくもないのではないか。もしかすると、私にとって、先生との出会いが、そのようなことであったかもしれない、と信じたい。その出会いがどのような意味をもつのか、今のところ、見えてくるものは何もない。しかし、五年、十年、もしかすると、二十年もの先になって見えるものかもしれない、早急な結論がでるはずもないことは承知しながら、そのように確信させる何かがある。これが、たとえばよくないだろうが、喉の奥に引っかかった小骨のように、私に、ときどき小さな痛みを感じさせることになる。

この次第は、ある日、私が、東京の所用から帰った夜、飯野先生から電話があったことから始まる。正確には妻が、留守中に受け、その夜遅く、何の用か不審に思いながら、私の方から先生にかけ直したのである。そのとき、用件の説明を受けず、とにかく会いましょうということで、3日後だったか4日後だったか、その頃、私が非常勤でいっていたある私大の半地下の喫茶店でお会いすることになった。それまでは、先にも触れたが、数年前の学会懇親会で、ほんの数秒、人を介して自己紹介しあった程度、だから、面識はないも同然である。先生が雨でもないのに傘をもち、私がいちいち濃い茶色のカバンを持っていることが目印とか、そういうことで、大学前のバス停で互いを探しあい、その後、喫茶室に向ったように記憶している。

テーブルを挟んで、少し長いような沈黙があり、それに耐えきれず、私の方から「それで、どういう章を担当することになるんでしょう」といい、「原稿、書いてもらうぐらいで、あんたをわざわざこんなところに呼び出したりしますかいな」と先生が答え、これが実質的な会話のはじまりであった。前夜、妻とは、経営学者の編集する本に原稿を書くことになるのかな、何をいったい書くのだらうという話をしていたので、そういう言葉が、沈黙の苦痛に耐えかねて出てしまったのである。それからは、余計な装飾などまったくなく、来ないかというお誘いで、話は突然核心部に入ってしまった。

それまでも、先生の分野、つまり、経営学については、友人知人も多く、どういう学問であるかについては、私もいくらか承知していたつもりだった。その学問傾向を、いくらか厳しい批判も含めて、ある程度その領域の概要は知っていたつもりである。だから、そのお誘いは、ちょっとリスクの多い人事ではないかと、訝る気持ちが先行してしまっただ。内心では、僕ならこういう人事はしないなと思い、失礼とは思いつつながら、これは、まともなお誘いですかと、聞き返し、それには、真正面から応えていただかなかつたという記憶が残っている。そこまではかなり鮮明に覚えている。しかし、それ以降は、私の思考過程はすっかり吹き飛んでしまっていて、今になると、思い出せることは少ない。多分、動揺していたのだろう。そうとしかいいようがない。

けれども、そのときの揺れ動く気分だけは、底に沈んだ澱のように消えることがない。私は、その後、慎重にはあるが、経営学に対する過剰な思い入れだけは避けてきたつもりである。先生も、そのことを、私にいくらか期待されていたような節を、その後の短い会話のなかから読み取ることができたように私には思える。これは、私の勝手な解釈かもしれないが、それへの回答が私なりに出せるようならば、それなりに先生にも納得してもらえそうな気はする。だから、着任後、経営学という学問との間合いを測る作業を、私自身に強いることになった。けれども、これは必ずしも楽な作業ではない。恨みがましいいい方で恐縮するが、そういう気持ちにさせたのが、先生との出会いであり、以後、この年月の課題であり、これからの、多分、この大学を去るまでの私の仕事ということになる。先生は、私の肩に、大きな、重たい、さらに恨みがましいいえば、余計な荷物を残してくれたものである。

以下、先生との最初の出会い以降の会話のなかから記憶をたどって、いくつかを思い出すままに記すことにする。

いうまでもないが、先生にはいつもバーナードがついてまわる。バーナードの学業の理論的な、いわば体系的な説明は先生の生涯を賭けた作業であったし、そのことが、経営学を超えて学問全体を刺激した効用は計り知れない。バーナードといえば飯野、飯野といえばバーナードであった。飯野バーナード学といわれる所以である。私でさえも、文学部の学生で教養課程にいたころ、すでに、バーナードを教科書程度の知識として知っていたし、田杉先生と並んで、先生のお名前も知っていた。

しかし、それを上台に、先生は、経営学の現状をかなり批判的にみっておられたようである。あるとき「企業だけが組織やないので」といわれた。経営学としては、その由来

からして仕方のないところがあるが、組織論とすれば、何も企業経営だけではない。もっともっと視野を広げてというか、その見通しを拡大させてもよいはずである。経営学は、コンサルタントまがいの仕事が多い。現状を追認することが経営学者の仕事でもあるような、語弊はあろうが、濡れ落ち葉のようにへばりつくような姿勢に対して、かなり厳しい視線をもっておられたようである。先生とすれば、企業でも経営でも組織でもよいが、それをもっと突き放して見るスタンスはとれないものか。そういう含みが、そのときのことばの含みとしてあったように思う。

というのも、先生は、学問という枠組みについて、かなり強くこだわりをもった人であったようだ。それと絡むことでもあるが、「あんたは、どうみても学会嫌いのようにやけど、学会と学界は区別せんとかかんですよ」という言葉を思い出す。続けて、学会は、嫌なら嫌で仕方がない、嫌なら適当にやっつけばよろしい。けれども、学界はそうはいかん。これだけは、誰かが手を抜けばその分だけ質が低下するのは間違いない、という意味の言葉を続けていわれた。このときは、先生との会話のなかでは、珍しいほど説教口調であったことを思い出す。

私も全身を耳にして聞こうとしたものだから、他にも短い会話のなかで、記憶に残るようなことがいくつもある。しかし、今、残された記憶のなかから、先生との短い会話の内容を絵取るようにして思い出すたびに、聞ききれなかったことの方がはるかに多いことを痛切に感じる。できるものなら、もっともっと先生からお話を聞きたかった。その想いだけは、日を追うごとに強くなる。あの含羞の笑いを思い出すたびに、そのことが残念でたまらない。

先生のご冥福を心よりお祈りいたします。